

オーストラリア二大政党制の変化

——2016年連邦選挙の分析——

陶山 宣明

Changes in the Australian Two-party System : Analysis of the 2016 Federal Election

SUYAMA Nobuaki

Abstract : This article argues that the Australian party system is changing significantly in the 21st century by analysing the 2016 Australian federal election, held on July 2, 2016. Prime Minister Malcolm Turnbull took his position by dethroning his predecessor Tony Abbott in a caucus revolt. This happened because the Liberal Party's Members of Parliament and Senators thought the party under his helm would fare better than the one under Abbott's. This election was triggered by Prime Minister Turnbull, who faced a resistant, unruly Senate, rejecting two government bills twice. The Liberal-National Coalition narrowly won an election with a slim majority seats of 76. However, they face an even tougher Senate with a larger number of cross-bench members, in addition to a strengthened opposition party : Australian Labor Party. Turnbull is not free from intraparty turmoil, which is now greater because of a greater dissatisfaction with his leadership. Finally, Turnbull needs to handle an increasing number of ALP-led state governments from now on. The erstwhile stable two-party system is under severe strains on various fronts.

はじめに

2016年7月2日に行われたオーストラリア選挙で、マルコム・ターンブル首相が率いる保守連合が辛うじて下院で安定過半数議席76を確保し、引き続いて政権を担うことになった。2013年9月7日の選挙では、前自由党党首トニー・アボットが、曲がりなりにも2期6年続いたオーストラリア労働党（ALP）政権に対して申し分のない勝利を収め、議席数の面からだけみると保守陣営は超安定政権として船出をした¹⁾。ところが、元々あまり国民に好かれていなかったアボットの人気は首相となってからも下向する一方で、決してカリスマ性があるとは言えないALPの新党首ビル・ショーター²⁾との「どちらが良い首相となるか」の世論比較で、2014年後半になってから遂に逆転されるようになった。

ALPが内紛のため選挙民の信用を失ったお陰で棚からぼた餅の如くに保守連合に勝利が転がり込んできた印象が強かった前回の選挙の後で、今度は与党となった自由党内でアボット首相のリーダーシップを懸念する勢力が増加していき、内部支持の翳りは予定された選挙の前年になって外部者の目にも顕著となった。そのままいくと、アボットを頂く保守連合は、たった1期だけ政権を努めただけで下野を強いられる恐れが多分にあった³⁾。2回の選挙ともほんの数ヶ月前に党首の挿げ替えで起こったドタバタ劇が党運を低める結果となったALPの二の轍を踏まないように、自らの議席の継続を強く望む自由党の陣笠議員たちは早めに動き、2015年2月9日にはアボットのリーダーとしての地位を見直す動議を提出した。この時にはアボットは動議を退けたが、ジョン・ハワードが引退した後に1度党首を務めた経験があるターンブルの復活を望む声は日増しに強まっていった。2015年9月14日

に、ターンブルはコーカス内投票でアボットおろしに成功し、自由党党首として返り咲き、ひいては、第29代首相に就任した⁴⁾。同日、副党首の見直しもあったが、ジュリー・ビショップはケビン・アンドリュースの挑戦を難なくかわし、留任となっている。

2013年6月26日にケビン・ラッドの挑戦に敗れたジュリア・ギラードは、投票の前に公約していた通りに次の選挙への出馬を断念し、政治の表舞台から姿を消した。とはいえ、元ALP党首として、引き続いて裏からの党への支援を惜しんでいない。対するラッドは、1998年に初めて自らが勝ち得たブリズベンの下院選挙区を苦戦しながらも守ったが、国政からきっぱりと引退を決めて、議員を辞職した。元来が外交官だったラッドは、国際場裏に活躍の場を移している。右派のラッドと左派のギラードが去った後で、ALPの新党首ショーテンは右派に属し、バランスを保つべく、左派ターニャ・プリバセックが副党首に就いた。

1977年に元自由党閣僚ドン・チップによって結成されて、中道を行っていた民主党は、多い時には9人の上院議席を誇り、堂々たる第三勢力として機能していた輝かしき時代もあった⁵⁾。ところが、人気が高かった党首シェリル・カーノーが1997年に活躍の場をALPに求めてから⁶⁾、党運は下り坂に転じ、遂に、2008年6月30日をもって1人も上院議員がいなくなった。国会で足場を失った翌年には、州レベルで最後の議員が南オーストラリア州上院で離党し、2015年にととう民主党は幕を閉じることとなった。古くはタスマニア州で1970年代に起源を持つ緑の党が、国会の第3政党としての地位を着々と固めていき⁷⁾、民主党が最後まで叶わなかった下院議員までも、今世紀に入ってニュー・サウス・ウェールズ(NSW)州とビクトリア州の選挙区でそれぞれ誕生した⁸⁾。

アボットからターンブルへの自由党党首の変更はたちまち2主要政党の支持率を逆転させ、2015年の年末から2016年1月にかけて保守連合への支持率はピークに達した。どちらが首相にふさわしいかの世論調査でも、ターンブルが野党党首ショーテンに大きく水をあけていた。ターンブル首相は、選挙戦に備えるのに充分なだけの時間的余裕を与えられたし、アボット側に付いた財務大臣ジョン・ホッキーは去って、シンパのスコット・モリソンに代わったし、外相ビショップは引き続いて自分をサポートしてくれていて、政局の面では、申し分のないように思えた。ところが、保守連合は快勝とは程遠い結果の辛勝となった。本稿は、過去の選挙も比較の見地から参考としながら、

2016年の選挙結果を分析することを目的とする。

1. オーストラリア政治の制度的な仕組み

オーストラリアの政治制度は、カナダに倣って、連邦制と議院内閣制が組み合わされている。但し、カナダでは、上院議員は選挙で選ばれずに、首相によって指名されて総督によって任命されるため、民主主義の原則に照らして、政府が責任を負う下院で通った法案を葬ることは難しい。ところが、オーストラリアの上院は、連邦が成立した時に、アメリカ合衆国の3E(Equal, Elected, and Effective)上院をそのまま採用し、州の規模に拘わらず同数の議席を全州に与え、議員は選挙で選ばれ、下院に劣らぬほどの権限を持たされている⁹⁾。金銭法案は必ず閣僚によって下院で振り出されないとはいけませんが、上院は変更を要求はできないにせよ、上院で否決されるとそのまま葬られることになる。いずれの法案も成立するためには、どちらが先でも構わないが、絶対に上院も下院も通されないとはいけないので、下院議席の過半数を占める政府与党とでも、上院は一筋縄ではいかない。上院は下院とは違った制度で選ばれるのに加えて、選挙のタイミングの違いもあり、上院と下院のねじれ現象は、稀ではなく、ほぼ常である。

オーストラリアの下院は、1選挙区から1名の議員が選出される小選挙区制だが、イギリスやカナダで使用されている単純小選挙区制、つまり、選挙区で1番多くの数の票を獲得した候補者が直ちに当選するような制度とは違って、優先順位付連記投票制が採用されている¹⁰⁾。この制度では、有権者は、自分が1番いいと思う候補者に印を付けるのではなく、投票用紙に名前がある候補者全員に優先順位を付けないと無効票になってしまう。最も好ましいと思う候補者には1を、2番目にいいと思う候補者に2を、その後もずっと続いて、最も好ましくないと思う候補者にまで数字を全部振らないといけないのである¹¹⁾。1番での得票は第1選好票と呼ばれるのに対して、2番での得票は第2選好票と呼ばれる。当選者を決めるのに、まず全ての候補者に第1選好票を割り振って、もし1発で過半数を得た候補者がいたら、その候補者が当選である。しかし、どの候補も過半数を獲得できない場合、最下位の候補を落として、その落とされた候補の票の第2選好票が残りの候補者に再分配される。このプロセスが候補者誰かが過半数を得るまで繰り返されて、究極の当選者が決定する。

この制度だと、第1選好票では1位だった候補が、第2選好票以下の再分配を経て、最初は2位や3位だった候補に追い抜かれてしまうことは往々にしてある¹²⁾。そのため、それぞれの政党は、第1選好票を投じてくれる支持者に、第2選好票以下の数字をどう振るべきか、印刷物を配付して指示を出すことが恒常化している。であるから、政党間の関係が、最終的な当選者を決めるのに大きな影響を及ぼす要因となる。極右や極左の政党を他の全ての政党が挙げて最下位に落とすように指示を出せば、そうした政党の候補が受かる可能性は極めて小さくなる。

上院選挙の単記委譲式投票制では、優先順位付連記投票制が比例代表制と組み合わせられている。州、準州、特別地域全体が1つの選挙区とされ、候補者は過半数を得なくとも、各政党は得票数によって配分される議席の数が決定される。投票用紙には、横に線が引いてあって、線の上に政党名がずらりと並び、線の下には候補者全員の名前が所属政党の真下に来るように印刷されている。投票者は、政党で選ぶか、候補者で選ぶか、選択ができる¹³⁾。線の上に並ぶ政党を選ぶか、線の下に記載されている候補者全てに優先順位を振るか、その二者択一で、線の上と線の下両方に手が付けられたら投票は無効になる。大概、上院選挙は下院選挙と同日に行われるため、下院議員の投票で優先順位を全部振る前か後で、上院議員の選出では楽に政党だけを選ぶようにするのは自然である。

政党を1つ選ぶ線上投票だと、以前は各政党が提出したグループ投票チケットに従って投票者の選好が決定されていた。例えば、ALPを選んだ票は、投票用紙の1番目の候補が1となり、2番目が2と自動的に読み替えられていた。ALPの候補者全員の順位付けが終わったら、その後に、チケットで指定されたALPが最も好ましいと見做す政党、例えば、緑の党とすれば、緑の党の候補に順番が1番上から振られていた。ALPが最も好まない政党が自由党とするならば、自由党の候補者は1番低い選好順位が振られていた。

ところが、上院選挙制度は今回の選挙から変更されていて、グループ投票チケットが廃止された。任意優先付投票となって、前と同じように、太い線の上で政党を選ぶか、線の下で個人の候補を選ぶか、投票者の自由なのだが、線上では、自分が最も良いと思う政党に1番を付けてから最低6つまで優先順位を振り、線の下では、1番から12番まで候補を選ぶ。政党を6つまで選ばなかったら即失格とはせず、付けた番号ま

では数えてもらえるし、候補者で選ぶと12番まで振らなくとも6番まであれば有効票とされる。以前の制度では、1番目に選ぶ政党によってほとんど自分の投票の中身が決められていたが、新しい制度では、投票者が自分で考えて決める割合が増えている。

各州の上院議員数は現在では一律で12で通常選挙ではその半分の6人が改選されるため¹⁴⁾、選挙の有効投票総数の7分の1プラス1票が基数となり、当選するにはそれ以上の得票数を必要とする。第1選好票で基数を上回った候補は即座に当選となり、その当選者の得票数から基数を引いた剰余が第2選好の候補に委譲される。そのやり方の後で6人の当選が決まらない場合、最少得票の候補から順に落としていき、落選者への票の第2選好票が割り振られるのは下院と同じである。当選者の剰余票の分配と落選者の票の分配のプロセスが、最後に6人だけが残るまで、繰り返される。行政府が責任を負う下院の方は選挙の後で直ぐ議員は就任するが、当選を決めた上院議員の任期は選挙の翌年の7月1日に始まり6年間である。

上院としては珍しくオーストラリアの上院には解散があり、下院同様に、首相の助言に基づいて総督が解散する。首相による解散が無条件の下院と違って、上院が解散されるためには、法案の通過が上院と下院の間でサンドウィッチになって行き詰まる条件が満たされる必要がある。それも、上院のみの解散はできず、上院は下院と同時に解散されなければならない。そうすることによって、法案行き詰まりの責を一方的に上院にだけ問わせないように、両院の連帯責任としている。初代首相エドモンド・バートンを含む豪州連邦の父たちは、1900年憲法第57条で、選挙で選ばれる両院の間に起こり得るデッドロックから抜け出すメカニズムを用意したのである。上院が解散された時には上院議員全員が直ちに職を解かれ、76議席の全てが選挙の対象となる。よって、同時解散選挙では、6州のいずれかで当選するための基数は有効投票総数の13分の1プラス1票で、通常の上院選挙よりも敷居が低くなるため、小政党に議席を取れるチャンスが高まる。

下院では、議長¹⁵⁾から向かって、右側に与党、左側に第1野党が席を取る。首相を中心にした大臣と第1野党党首を中心とした影の大臣は長い椅子の最前席に座り、俗にフロントベンチャーと呼ばれる。対して、バックベンチャーは後方の短めの席に座る陣笠議員である。与党でも第1野党でもない小政党の議員や独立議員はクロスベンチャーと呼ばれ、国会のフロアー席

が丸くなった辺りのコーナーに席を取るが、戦後の下院で、クロスベンチャーは最高でも5人を数えたのみである。与党側の方が人数で勝っているのが自然であるから、クロスベンチャーの席の位置はどちらかと言えば第1野党寄りになる。他方、上院では、議長¹⁶⁾の右側に与党、左側に第1野党が陣取るのは同じであるが、クロスベンチャーは議長から見て正面に回る形のブロックにまとまって席を取る。議席による多数決の原理に基づいて与党と野党が決められる下院とは違って、上院では与党議員の数が第1野党の議員の数より少ない場合も自然に起こり、クロスベンチャーの数が急増傾向にある。

2. 連邦制の政権交代の法則

連邦制での選挙民の投票パターンについて、経験的にバンドワゴン理論とバランス理論が窺える。バンドワゴン理論とは、選挙民は勝ち馬に乗ってなるだけ利を得ようとする意識に着目し、既に成功している政党になびく傾向があると指摘する。例えば、連邦レベルで政党Aが長期政権を築いていれば、州レベルで敢えて違う政党Bに投票せずに、むしろ同じ政党Aを選ぶことによって自分たちの州も得すると思われるのである。逆方向から見ると、州レベルで政党Cが堅固な政権を維持しているとすると、その州の選挙民については、同じ政党Cが国全体をも治められるように連邦選挙でも政党Cの候補を支持する。対照的に、バランス理論とは、選挙民が権力の1党集中を意識的に避け、州レベルと連邦レベルで違う政党を政権に就けようとする動きで、バンドワゴン理論とは真反対の現象を指している。議員内閣制では議会で過半数議席を得た与党が圧倒的な優位に立て、大統領制の分権が期待できないため、特に議員内閣制を採る連邦制では違うレベルで権力の分散化が図られる。つまり、政党Dが連邦レベルで政権にあれば、州レベルでは違う政党Eが意識的に好まれ、政党Dは選挙で苦戦することとなる。州で政党Fが牙城を築いていれば、その州民は連邦選挙が来ればF以外の政党に加担する。

カナダ人の政治学者ロバート・マクレガー・ドーンがカナダ連邦の政権交代に適用力があるとして、2つの理論の融合を提唱した¹⁷⁾。カナダのデータから引き出された融合理論では、州レベルで政権交代が徐々に起こっていき、多くの州を掌中に収めた連邦レベルの野党が、そうやって州の中核に築いた陣地をベースにして本丸を落とすことに成功する。州レベルでの選

挙戦では、連邦レベルで政権にない政党は、政権にある政党を、国全体とは異なる州特有の利益を振りかざしてうまく攻撃できる。これから政権奪取を狙う州レベルの野党は、特に州レベルの与党と連邦レベルの与党が一致する時に、両方の悪政を槍玉にあげることもできるし、また、同じ組織に属することを理由にして一方の悪政を他方の責任にしてあげつらうこともでき、連邦内で自分たちの党とライバル政党が置かれた立場を戦術的に使える。州レベルで次々と政権を取り込んでいけば、オセロ・ゲームの如くに、終盤に国全体の政治をどかんとひっくり返せるという訳である。

2007年にハワード自由党政権を遂に倒したラッドが首相に就任した時には、キャンベラの連邦と特別地域政府のみならず、6州都、1準州都も全部ALPが押さえて完全征服をしていた。言い方を変えると、ハワードは連邦首相在任中の後期、州、準州、特別地域では全部ALPが政権にあったということである。ラッドとギラードが連邦首相を務めた間に、ALPは1州、2州と失っていき、2013年にアボット自由党が政権に返り咲いた時までは、表1にあるように、保守陣営は4州と1準州で政権を奪取していた。それも、NSWを始めとする大きい方から数えて4つの州を取り押さえていたことは重要である。

2013年にラッド保守連合が政権を奪ってから、州レベルでは、ビクトリア州とクインズランド州で、保守連合が1度は手にした政権をALPに明け渡した。ビクトリア州は、ALPが、2010年の選挙で数議席の差で敗れて1期だけ保守連合に譲った政権を奪回しただけの印象が強い。クインズランド州も状況が似ている、ALPの長期政権が2012年の選挙で1期だけ自由国民党政府に政権を譲って、奪回した形である。けれども、実質にはかなり違いがあり、州で初の女性首相となったアンナ・プライが1回目の2009年選挙では自由国民党政府の追撃をかわしたが、2回目の2012

表1 保守連合政権の始まりと中間点で州（準州・特別地域）レベルでの政権

	2013年	2016年
ニュー・サウス・ウェールズ (NSW)	自由党・国民党	自由党・国民党
ビクトリア (VIC)	自由党・国民党	ALP
クインズランド (QLD)	自由国民党	ALP
西オーストラリア (WA)	自由党・国民党	自由党・国民党
南オーストラリア (SA)	ALP	ALP
タスマニア (TAS)	ALP	自由党
豪州首都特別地域 (ACT)	ALP	ALP
ノーザン・テリトリー (NT)	地方自由党	地方自由党

年選挙では史上最悪の大敗を喫し、51も保持していた議席がたったの7まで減った¹⁸⁾。直ちに引責辞任したブライの後に州のALP党首に就任したアナスタシア・バラシェイが、2015年、これ以上ない滑り出しをしたキャンベル・ニューマン自由国民党政権をたったの1期で葬った選挙なのである。ニューマンは、2012年選挙にて初当選で州議会入りし、2015年選挙では自らの選挙区で落選したので、州首相を努めた以外には議員経験がないという稀なケースである。

タスマニア州だけはバランス理論に逆行し¹⁹⁾、キャンベラで2013年に保守連合が政権に就いて、その翌年に、それまで16年もの長い間続いていたALP政権が自由党に足元をすくわれた。自由党がタスマニア州政府を運営するようになったので、バンドワゴン理論通りに行けば、自由党はそれまで3議席保持していた連邦下院議席をむしろ増やせるはずである。ところが、実際にはその逆の現象が起こり、後述するように、自由党は保持していた議席の全てを失っている²⁰⁾。因みに、ノーザン・テリトリーでは、連邦選挙の後の2016年8月27日に行われた準州選挙で、地方自由党はALPに大敗し、政権を明け渡した²¹⁾。バランス理論通りに行けば、保守派の連邦政権の続く間に、西オーストラリア州とNSW州の連立政権が倒れるはずであるが、予想に過ぎない。バランス理論に適合するように、州レベルでの政権交代を見たビクトリア州とクインズランド州の今回の連邦選挙での州別選挙結果の分析は次項に譲る。

3. 保守連合が辛勝して 与党として生き延びた下院

自由党は、ALPと違って、オーストラリア全域をカバーしておらず、クインズランド州では自由国民党が、ノーザン・テリトリー準州では地方自由党が独立した党組織を運営している²²⁾。加えて、農村部を地盤とする国民党と連立内閣を模索するのが常である²³⁾。保守連合はぎりぎり安定過半数となる76議席を獲得し、引き続いて政権を担うことになったものの、国民党が1議席増やしているのに対して、自由党の方は13議席も減らしたことは由々しき事態である。ノーザン・テリトリーには2001年から2議席あるが、これまで、1期を除いて、ALPと地方自由党が仲良く1議席ずつ分けて合っていたが、今回の選挙では、ハード自由党が大敗した2007年選挙と同様にALPに2つとも持っていかれた。逆に、ALPは、確かに敗けはしたものの、得票率を高めていて、最終的に14議席も増やす結果となった。よって、ショーテン党首に責任追及の声は起こっておらず、次の選挙まで舵を取り続けることとなった。別名ベルウェザー選挙区と呼ばれていて政権に就く政党が勝つイーデン＝モナロでは、全体では破れたALPがこの議席を奪ったため、変則的な現象となった²⁴⁾。

ALPよりも左側に位置する緑の党はメルボルンの1議席を堅実に守っただけでなく、隣接するバットマン選挙区の第1選好票で党が立てた候補が1位となり、いずれ下院の2議席目も取れる予感を抱かせる。全体でも得票率を10%台に戻し、更なる伸びが予想され

表2 連邦下院の選挙結果

	得票率 (%)	スウィング (%)	議席数	変化
オーストラリア自由党☆	28.67	-3.35	45	-13
自由国民党☆	8.52	-0.40	21	-1
オーストラリア国民党☆	4.61	+0.32	10	+1
地方自由党☆	0.24	-0.08	0	-1
オーストラリア労働党★	34.73	+1.35	69	+14
緑の党	10.23	+1.58	1	±0
ニック・ゼノフォンのチーム	1.85	+1.85	1	+1
カッターのオーストラリア党	0.54	-0.50	1	±0
パーマー統一党	0.00	-5.49	0	-1
独立	2.81	+1.44	2	±0
その他の政党	7.79	+3.28	0	±0
合計	100	0	150	±0

☆連立与党 ★野党第1党

る。反対に保守連合よりも右側に立つボブ・カッターのオーストラリア党は、党首自身がクインズランド州北部に持つ唯一の議席を固守した。カッターは、父の地盤を継いで国民党の下院議員だったが、離党して独立議員となった後に、2011年に現政党を立ち上げた。緑の党と同じく、州議会にも議員を送り込んでいるが、息子を党首に頂くクインズランド州に限られている。

ニック・ゼノフォンのチームは、最初は1997年に行われた南オーストラリア州議会選挙に「ノー・ポーキー」の名で政治デビューを果たし、州に増えたスロットマシンに反対する政策を訴えた。党首のゼノフォンはこの時に当選して州の上院議員となって8年1期の任期を全うして再選されたが、連邦レベルへ移行するため2007年に州の上院職を退いた。2007年連邦上院選挙で、南オーストラリア州からゼノフォンは独立議員として当選した。この時までには、ゼノフォンは賭け事反対を唱えるシングル・イシューの政治家から脱却して、2大政党によって真剣に取り扱われていないような問題を重要視して、幅広く中道を目指し、1度目の挑戦で連邦上院議員への鞍替えに成功したのである。2013年にチームの名称を頂きながらも正式な政党として立ち上げられ、今回の選挙では上院のみならず下院にも候補を立てた。南オーストラリア州の地域政党から全国政党へと発展するべく、東の3大州にも候補を立てている。その結果、南オーストラリア州のアデレードの南西に位置するメイヨー選挙区で初の下院議員を誕生させた。自由党の超安全選挙区で第1選好票では自由党の現職議員が1位に終わったが、僅差で2位に付けていたレベッカ・シャーキーが多くの第2選好票を割り振られて、55%まで伸ばして比較的楽に当選を決めた。同じく中道指向だった民主党は最後の最後まで下院議席を取れず仕舞いだったが、ゼノフォン・チームは下院に足場を築くことに成功した²⁵⁾。

パーマー統一党は、2013年に地下資源で潤った富豪クライブ・パーマーによって立ち上げられ²⁶⁾、前回の選挙では下院全ての150の選挙区で候補を立てた。結局、クインズランド州農村部の選挙区で議席を獲得したが、上院の議席を3州（クインズランド、西オーストラリア、タスマニア）でそれぞれ1つずつ、合計で3議席も獲得している。最初は高く上げられたアドバルーンに惹かれて、クインズランドやノーザン・テリトリーの（準）州議会議員も取り込んだりしたが、明確な党是を持たない政党は時が経てば分解していく

のが自然である。党首自身も実際には政治にそこまで熱心ではなかったし、理想や具体的な政策を巡って様々な内紛が起り、今回の下院選挙では、1人も出馬させていない。

アンドリュー・ウィルキーとキャシー・マックゴワンの2人が独立議員として当選したが、それぞれの選挙区はタスマニア州のホバートを含む中心部とビクトリア州農村部で、ウィルキーは3選、マックゴワンは再選である。NSW州を選挙区にして下院議員を比較的長く努めたロブ・オークショットとトニー・ウィンザーの2人については、前者は2013年選挙で出馬を見合わせて既に政界を退いていたが、後者も同じ時に1度は引退したが今回同じ選挙区を奪い返そうと試みた。ところが、最初はクインズランド州選出上院議員として連邦政治に乗り出したバーナード・ジョイスが、下院の鞍替えを図って本来の地元の選挙区を自分のものとしていた。無所属のウィンザーは挑戦者の気持ちで国民党党首に果敢に挑んだが、惜しくも次点に終わった²⁷⁾。

下院のクロスベンチは、小政党と独立議員を合わせて、たったの5人である。だが、今の国会では、その5人が小さくない力を発揮できる状況にある。保守連合が安定過半数を確保したとはいえ、たったの1議席多いだけで、1人を議長に出しているから、与党と第1野党の人数関係は実質的には75対69となる。カッターのオーストラリア党は保守系だが、緑の党は性格的にALPに近いし、2010年のALPマイノリティ・ガバメントの成立の時にどちらかと言えば右寄りの独立議員が協力関係を築いたことから分かるように、2人の独立議員は条件次第でどちらにも付き得る。ゼノフォンのチームはどちらにも与しない中道路線をいく方針にせよ、上院でより多くの議席を占める緑の党よりも、強いバーゲニングの位置にあると言える。何らかの事情で保守陣営の議員が欠席すると、政府法案が簡単に否決され得るシナリオが成立する。

州別に傾向を概観すると、自由党は、NSW州だけで7つもの議席を減らしている。NSW州は国全体で150議席のほぼ3分の1に当たる47議席を誇る最大州で、この州での戦績が大きな意味を持つのは自明の理である。逆に、ALPはNSW州だけで6議席も増やした。しかし、最小州のタスマニアを軽視すべきではなく、小選挙区では投票率から議席率への転換でブレが大きく、得票率が4.82%落ちると、自由党は保有していた3議席を全て失い、タスマニア州から完全に締め出された。反対に、ALPは得票率を3.09%増

表3 州（準州・特別地域）別連邦下院議席配分

	NSW	VIC	QLD	WA	SA	TAS	ACT	NT
自由党	16	14	0	11	4	0	0	0
自由国民党	0	0	21	0	0	0	0	0
国民党	7	3	0	0	0	0	0	0
ALP	24	18	8	5	6	4	2	2
緑の党	0	1	0	0	0	0	0	0
ゼノフォン	0	0	0	0	1	0	0	0
豪州党	0	0	1	0	0	0	0	0
独立	0	1	0	0	0	1	0	0
合計	47	37	30	16	11	5	2	2

やすと、タスマニア州で NSW 州に次ぐ 3 議席の増加を見た。自由党は、ビクトリア州では前回と同数の下院議員を受からせていて、ビクトリア州で議席を減らしていたら今回の選挙で最終の勝利は絶対になかったと言って過言ではない。ターンブル首相のお膝元は NSW 州だが、今回の選挙ではビクトリア州に救われている²⁸⁾。

オーストラリアでは投票が義務付けられているため、毎回凡そ 95% の高い投票率を誇る。自由意思による投票に任せていて投票率が低い政治制度では、キャンペーン中に特定の政党や候補者に投票の意思を固めなければ、選挙民は投票に赴かない。義務投票制では投票の意思がたとえあやふやでも、罰金を免れるため投票所には出向いて誰かに票を入れるか、或いは、投票用紙を白紙で提出する。義務投票制と自由投票制の比較において、後者の方が選挙運動の効果がある。なぜなら、強く働き掛けることによって 10% でも 20% でも投票率を高める余地がある方が、自党への票を増やし易いからである。つまり、投票率が低い選挙区に党首自らが乗り込んで応援すれば運動対効果があるとの理屈が成り立つ。ところが、オーストラリアのように最初から高い投票率の場合、政権を担う明確な目標がある主要政党が効率的に選挙に勝つためには、自党か直接の敵党が支持で大幅なリードを保って特定候補の当選が堅い安全選挙区は少々軽視しても、どちらに転ぶか分からない激戦区に力を集中して議席数を増やそうとするのが賢明な戦術である²⁹⁾。

オーストラリア選挙委員会は、投票結果に基づいて、最終的な 2 党間の選好率でリードする党が 60% を超える選挙区は安全で、60% 以下 56% 以上をほぼ安全、56% 未満をマージナルと分類する。表 4 は委員会によって 2013 年選挙から作成された資料に基づいているが、当然、選挙に勝った保守連合の方が多くの安全選挙区を持ち、NSW 州、西オーストラリア

表4 安定度による選挙区の種類（2013年選挙）

	保守連合	ALP	その他	合計
安全	43	16	1	60
ほぼ安全	21	10	0	31
マージナル	27	28	4	59
合計	91	54	5	150

州、南オーストラリア州では全体の 3 分の 1 以上が保守連合にとって安全だった。安全選挙区として必ず保持できる保証はないけれど、党の中核としてはマージナル選挙区に集中して相手方から奪うのに専念するのが賢いやり方である。

保守陣営が選挙区の得失を均すと 14 議席を ALP に奪われたことになるが、西オーストラリア州で 1 つ、クインズランド州で 2 つほぼ安全な選挙区を落とした以外には、全てマージナル選挙区をひっくり返されている。南オーストラリア州では、安全選挙区をゼノフォン・チームに持っていかれた。逆に ALP は、1 つだけ自由党にビクトリア州のマージナル選挙区を奪われている。

4. 恒常的にねじれをもたらす上院

普通、上院と下院は同日に選挙が行われるが、役割や任期を異にする上院議員の選挙は意味合いが大きく違う。内閣は上院に対して辞職まで問われる責任を取る必要はないし、上院で絶対に内閣不信任案が提出されることはない³⁰⁾。他方で、選挙で選ばれ、名目的には州の利益を代弁するオーストラリアの上院はとてつもなく力が強い。下院選挙で決まる政権政党が上院で過半数議席を占めないことは、特に、ALP 政権の時には頻繁に起こっていた。下院だけでは数の論理でほぼ無力にされる野党と違い、上院で過半数議席を保持する野党は効果的に野党としての役割を果たすことができる。ところが、21 世紀に入り、与党でもない、

第1野党でもない、クロスベンチの議員の数が上院で増える傾向にあった。

冷戦時にイデオロギーの問題でALPを政権の座に就けないことを至上の目的とする民主労働党と呼ばれる政党があったが、最高でも、1971年の議会で5議席有しただけである。独立議員を合わせても、2桁に達することは1度もなかった。引き続いて上院で一大勢力となった民主党でも、最高で1999年7月1日に9人を有したのみである、その時に最も恐れられたのは、それだけの数の上院議員を当選させた民主党ではなく、たった1人の上院議員をクインズランド州で受からせた反移民をうたうワン・ネーション党であった。そこから辺りから、上院には10人前後のクロスベンチ議員がいるのが普通となり、ALPどころか、保守連合にせよ、76議席から成る上院の過半数を確保するのはとても無理な注文となった。野党が過半数の議席を有する上院よりもクロスベンチ議員が鍵を握る上院の方が個別の対応を強いられるので、政府にとっては面倒である。

2016年選挙では76人全員のの上院議員が改選となったのは、ターンブル首相が下院のみならず、上院も同時に解散に踏み切ったからである。オーストラリアの歴史を通じても同時解散選挙はたった7回目でしかなく、2016年の前の同時解散は1987年、つまり29年前まで遡らないといけない。両院の不一致で法案の通過が妨げられている時に首相に与えられた宝刀だが、同様の事態に追い込まれたら全ての首相が同時解散に踏み切らないといけないわけではない。ターンブル首相には同時解散する条件が整ったから引き金を引いたのは、何と18人まで増えていたクロスベンチ議員の

数を減らそうとする目論見があったからである。

その結果、保守連合は過半数の上院議席を取れなかったのは元より、クロスベンチ議員の数が逆に20人(緑の党を除外すれば11)にまで増えた。理由として、上院の全員を解散したため当選の敷居が低くなり小党の議員や独立議員が当選するチャンスが高まった点が指摘される。加えて、上院の選挙のやり方の変更も、クロスベンチ議員が増えた理由として指摘している人がいる³¹⁾。

ワン・ネーションは1996年に国会処女演説をしてからオーストラリア内外にセンセーションを巻き起こしたポーリーヌ・ハンセンを党首に頂く政党である。1度は死に絶えたと多くの人が思っていたが、ヨーロッパ各国でポピュリズム政党が勢力を伸張する中、復活してきた。クインズランド州だけでなく、NSW州と西オーストラリア州でも上院議席を獲得し、今では4議席を誇る立派な政党である。0から一挙に4まで増やした党力はこれからも決して無視できないし、20世紀においてフランスの国民戦線など反移民政党はばらばらと世界の他地域にも散見できたが、今や潮流になっているため、そうした点でも、これからのワン・ネーション党の動きには目を離せない。家族第一党は、経済的にも社会的にも保守主義の政党で、2013年に初の上院議席を党首のボブ・デイが南オーストラリア州で取って、今回その議席を守った³²⁾。ゼノフォン・チームは、下院議員を1人当選させただけに止まらず、根城とする南オーストラリア州で党首も含む3人が議席を得た。

新興勢力、デリン・ヒンチの公正党は、メディアで顔が売れている党首がビクトリア州にて議席を得た。

表5 連邦上院の選挙結果

	得票率 (%)	スウィング (%)	獲得議席数	変化
保守連合	35.18	-2.53	30	-3
ALP	29.79	-0.32	26	+1
緑の党	8.65	+0.01	9	-1
ワン・ネーション党	4.29	+3.76	4	+4
ゼノフォン・チーム	3.30	+1.37	3	+2
自由民主党	2.16	-1.75	1	±0
公正党	1.93	+1.93	1	+1
家族第一党	1.38	+0.27	1	±0
民主労働党	0.68	-0.16	0	-1
ジャッキー・ランビー	0.50	+0.50	1	+1
車愛好党	0.38	-0.12	0	-1
パーマー統一党	0.19	-4.72	0	-3
その他	11.57	+1.76	0	±0
合計	100	0	76	±0

表6 州別の連邦上院選挙結果

	NSW	VIC	QLD	WA	SA	TAS	ACT	NT
保守連合	5	5	5	5	4	4	1	1
労働党	4	4	4	4	3	5	1	1
緑の党	1	2	1	2	1	2	0	0
ワン・ネーション	1	0	2	1	0	0	0	0
ゼノフォン	0	0	0	0	3	0	0	0
公正党	0	1	0	0	0	0	0	0
ランビー	0	0	0	0	0	1	0	0
自由民主党	1	0	0	0	0	0	0	0
家族	0	1	0	0	1	0	0	0
合計	12	12	12	12	12	12	2	2

不正がまかり通っている腐敗した社会に新風を巻き起こすことを72歳の政治家は唱えて、議席を得た。ジャッキー・ランビーは元々パーマー統一党のメンバーとして上院にタスマニア州から議席を得たが、離党し、独立したネットワーク党を設立し、タスマニアからの上院議員の議席を維持した。2001年に立ち上げられて、2013年に初議席を得た自由民主党は、保守連合よりも更に右側に位置する政党で、ニュージーランドのACTに似ている。経済的に自由放任を意味するレッセフェールが党是で、自由貿易を推進し、国内の産業政策においても、なるだけ保護をしない、小さい政府を標榜する。2013年選挙で1つ取った議席を、今回も守った。

おわりに

7月2日に行われた連邦選挙で保守連合が勝利し、ターンブル首相は引き続き政権を担うことになったが、前途多難である。下院で76議席の安定過半数を得たけれども、そこでもALPと大差があるわけではないし、ターンブル政権の脆弱性はまず党内にある。2013年の選挙で勝利して首相の座に就いたアボットが極めて選挙民に不人気な政治家で党内でもそのゴリ押し手腕故に反発を食らう傾向があり、ターンブルは自由党の国会議員のみから成る党コアスで反乱に成功した。ターンブルはアボットよりも多くの党議員の支持を受けたのは、ターンブルなら来たる選挙で保守陣営に勝利をもたらしてくれるだろうとの期待に裏付けられていた。ところが、その結果は、辛勝だったため、ターンブルのリーダーシップに党内だけでなく、連立政権を維持する他の保守陣営の政党から不満の声が出て仕方がない。

カナダのジャスティン・トリュドー自由党内閣は

2015年選挙に完勝して順風満帆な滑り出しとなったが、その背景はターンブル保守連合内閣と好対照を成す³³⁾。第1に、トリュドーは選挙に圧勝したため、ターンブル首相のような苦しい国会運営を一切強いられない³⁴⁾。第2に、トリュドーは党内をきっちりまとめていて、党首の足元をすくう輩が見当たらない。ターンブルの具体的な仮想代替党首はアボットにせよ、アボット以外に有能な政治家が見つければいつでも自分への支援が流れていく可能性がある。トリュドーが自由党党首になった経緯も、トリュドー以外にはうってつけの人材は党内に見当たらないとのコンセンサスがあったし、前の2人の党首が続けて選挙で大失敗した後に、期待通りの勝利をもたらしてくれたので、自由党内で不満の声が上がるとはとうてい考え難い。ターンブルはそもそも党首になった経緯に、ALPの非民主的な首の挿げ替えを散々なじっておいて、自由党も同じことをやった後ろめたさがある。最後に、カナダの上院は任命されていて大っぴらに下院に牙をむくことは通常はあり得ないが、ターンブルの方はこれからも長らく頭を悩まされると予想される上院でのクロスベンチャーに正面から向き合わないといけな。ターンブルが前の上院には恒常的に楯突かれて、行く手を遮られていたから解散に踏み切った結果、新しい上院は更に保守党陣営の政府にとってやりにくい上院となってしまっている印象がある。

ターンブルは組閣に当たって、前の内閣から大きくずれることなく、モリソンを財務相に、ジュリー・ビショップを副首相兼外相に据えている。前党首アボットは自らの選挙区を守り下院議員を続けているが、ターンブル内閣には入れてもらえていない。ターンブル首相がこの先雲行きが怪しいなら、副党首ビショップがサブの地位をかなぐり捨てて、自らがリーダーとして党を率いていけるだけの逸材なのかは評価が分かれ

る。次の候補がモリソンにせよ、ビショップにせよ、選挙こそが最も正当性がある新首相の承認であるのに逆流して、国会議員の打算的な配慮だけで首相がころころ変わるのにオーストラリア国民はうんざりしているし、国外からはオーストラリア政治の不安定さだけが目に付く結果となっている。むやみやたらと首相が変わることは、国際政治のみならず、国際経済、国際ビジネス、国際文化関係にも好ましくない影響が及ぶ。

注

- 1) 陶山宣明「2013年オーストラリア連邦選挙の分析」『帝京平成大学』第25巻、2014年3月、87-95頁参照。
- 2) 前党首ラッドが選挙の敗北を受けて引責辞任した後で、アントニズ・アルバニズと争って、ショーテンがリーダーに選出された。それまでのALP党首は現職の連邦国会議員から成るコーカス内の投票で選出されていたが、初めて、議会の外の一一般の党員も投票に加わった。
- 3) オーストラリア選挙民は辛抱強くて、1回の選挙に勝利して政権に就いた政党に少なくとももう1度はチャンスを与えるパターンが窺える。ジェームズ・スカリン労働党政権(1929~1932年)が、1度選挙に勝ただけで退く羽目になったのが最後である。その時には、未曾有の世界大恐慌にぶつかり、対応を巡ってALPはずたずたに分裂し、対抗勢力が結集して統一オーストラリア党(UAP)が生まれた特殊事情があった。しかし、選挙に勝って新しく与党となった政党が2回目も無条件に勝たせてもらえる保証などどこにもなく、結果としてほぼ11年9ヶ月に及ぶ長期政権となったジョン・ハワード保守連合政権とでも、2度目の1998年選挙では第一選好票ではキム・ビーズリー率いるALPに負けており、1歩間違えればたった2年と7ヶ月で野党に転じる可能性はあったのである。
- 4) Mark Craig, "Towards the 2016 Australian Election: From the Abbot to Turnbull Coalition Governments", *The Otemon Journal of Australian Studies*, Vol.41, Dec.2015, pp.45-63参照。
- 5) John Warhurst (ed.), *Keeping the Bastards Honest: The Australian Democrats' First Twenty Years*, Allen & Unwin, St. Leonards, NSW, 1997参照。
- 6) 所属政党を変更するだけではなく、その時に手にしていたポストを軽々しく投げ捨てると、選挙民に寝返りオポチュニストの印象を与えてしまう傾向がある。カーノーは、1990年の選挙でクインズランド州から上院の議席を得た後で、短期で党首の座に登りつめ、1996年選挙では自らの議席を確保するだけではなく、民主党全体に最高の結果をもたらした。まだ任期がその先5年以上も残っていた上院議員の職を辞して、メジャーな政党で閣僚になる野心に駆られた政治家は、1998年選挙でクインズランド州都ブリズベン近くの選挙区で下院に議席を得て、直ちにビーズリー野党党首によって影の内閣の重要ポストを与えられた。しかし、下院議員をたった1期務めただけで、2001年には落選の憂き目に遭い、ALP内の地位を失った。
- 7) 陶山宣明「緑の党の豪加比較-選挙制度が議員選出結果に及ぼす影響-」『帝京平成大学紀要』第19巻、2007年12月、103-114頁参照。
- 8) 2002年にシドニーとウロンゴンの間にある海岸線のカニングハム選挙区で緑の党初の下院議席を得たマイケル・オーガンは、ALP議員が辞職した後の補欠選挙で、自由党が候補を立てず、独立候補も選好を回してくれた偶然に助けられた。2004年、2007年の総選挙では、同選挙区で、ALP、自由党候補の後塵を拝している。他方、アダム・バントは、ALPが1世紀以上に渡って他党に譲っていなかった安全選挙区で、2010年総選挙で堂々と勝利し、2013年、2016年には第1選好票でも1位となって議席を守り続けている。
- 9) 陶山宣明「The Canadian and Australian Senates Compared」『オーストラリア研究』第2号、1991年、99-136頁参照。
- 10) オーストラリアも、イギリスの伝統に倣って、初期の頃には単純小選挙区制を使用していた。1918年補欠選挙で、ナショナリスト党と地方党が保守票を奪い合い、漁夫の利でALPが勝利したことから、翌年の連邦選挙からナショナリスト政府は現行選挙制を採用入れた。
- 11) オーストラリアでは、1924年から投票が義務付けられていて、正当な理由がなくしてこの義務を怠った場合には罰金20ドルが科せられる。従って、政治には無関心な層の有権者も渋々ながらも投票場に足を運び、深く考えずして、投票用紙に並ぶ候補者の上から下に1から最後まで順番に番号を振って終わりとするドンキー票が少なからず見受けられる。そうした無責任な票によって激戦区の結果が左右されると堪らないので、候補者をアルファベット順に並べないなど、投票用紙の印刷に最善の工夫をする。所属政党を左側に大きくマークで表示し、投票者の政党意識を高めている。
- 12) 2016年選挙で、下院の選挙区150の内、第1ラウンドで決まったのは48選挙区(保守連合32、ALP16)に過ぎず、第1ラウンドでは2位につけていた候補が逆転当選したのが16選挙区ほどあった。その内の14選挙区では、保守陣営の候補が第1選好票ではリードしているながら、第2選好票の割り振りでALPに抜かれている。なお、3位だった候補が勝利した選挙区はなかった。
- 13) 実際には、投票者のほとんどが、1つだけの政党を選ぶだけで済む線上での政党投票を選ぶ。小さい州や準州、特別地域では全部の候補者の数とて限られているが、大きい州では候補者の数が多過ぎて候補者投票は面倒だからである。
- 14) 但し、準州と特別地域の上院議員だけは任期が3年で、3年毎に改選がある。従って、通常の上院選挙では、40の議席を争うことになる。
- 15) 現議長はトニー・スミスでビクトリア州を選挙区とする自由党議員、2015年8月10日に任命されている。
- 16) 現議長はステイブン・パリーでタスマニア州選出の

- 自由党議員、2014年7月7日に任命されている。下院議長はスピーカーと呼ばれるのに対して、上院議長の呼称はプレジデントである。
- 17) 陶山宣明「カナダとオーストラリアの連邦制での政権交代の法則-1980~2008-」『オーストラリア研究紀要』第34号、2008年12月、212~213頁。
- 18) 前年3月にNSW州でALPは女性首相クリスティーナ・ケニアリーの下で大敗を喫しているが、このクインズランド州の惨劇はNSWを上回るほどの屈辱的な敗北だった。敗因として、ALPが当てにしていたブリズベン都市部の議席をごっそりと自由国民党にさらわれたことが指摘される。
- 19) タスマニア州の下院は、連邦上院と同じ単記委議式投票制を使用している。州全体を5つの選挙区を分けて、各選挙区から5人の議員を選ぶ。小選挙区制に比べると選挙毎に大きな揺れがないのが特徴だが、資源が豊富な西部のブランドン地区では、5つある議席の内、自由党が4議席も奪っている。
- 20) Matthew Denholm, "A Test of Will Power", *The Australian*, Aug.10, 2016, p.11.
- 21) この結果はバランス理論に適合すると解釈が可能である反面、準州は普通の州と違い、日頃から連邦に対する州特有の利益を全面に打ち出した政党政治が活発でない。それに、地方自由党は、オーストラリア自由党と同一組織ではない。ジャイルズ前首相のリーダーシップのあり方に敗北の原因を求めるのが妥当である。地方自由党が連邦レベルも準州レベルも関与していて、準州レベルで大敗を喫する前に7月2日の連邦選挙でも先に準州からワイプアウトされている。Amos Aikman, "Hitting rock bottom in the Top End", *The Australian*, Aug.16, 2016, p.11.
- 22) そうした意味での全国政党がALPで、他には緑の党だけである。
- 23) 第2次世界大戦前には国民党の前身である地方党を含まない保守陣営の政権が存在したが、戦後の保守陣営による政権には全て地方党、国民地方党、国民党が関わっている。現在では、国民党党首が連立内閣の副首相へ任命されることが慣例化している。自由党党首だったハロルド・ホルト首相が海で突然に行方不明になったため、1967年の暮れから1968年の始めまで短期ながらも暫定的に副首相から昇格して首相を務めたジョン・マッキューンは地方党の党首であり、オーストラリアの歴史で初の正式な地位としての副首相だった。
- 24) 1901年から約半数存在するオリジナル選挙区の1つで、パターンから最後に逸脱したのは、保守陣営が勝利した1969年選挙でALPが当該選挙区を取った時なので、47年前である。
- 25) "Maverick emerging as Australia's kingmaker", *The Japan Times*, July 4, 2016, p.7.
- 26) 自由国民党内から反目して新党を設立する過程で、かつて1930年代にナショナリスト党が発展してジョゼフ・ライオンズなどの首相を生んだ統一オーストラリア党の名前を拝借しようとしたが異議を申し立てられ、パーマー統一党の名称に落ち着いた。
- 27) 2人の独立議員がギラード首相の支持に回った経緯については、杉田弘也「オーストラリアの執政制度-労働党政権(2007-13)にみる大統領制の可能性-」, 日本比較政治学会編『執政制度の比較政治学』, 第3章, ミネルヴァ書房, 78-79頁。
- 28) ビクトリア州ではバランス理論通りに州の政権が交代した後に、この連邦選挙では州のALP政権にバランスさせようと自由党を支持したと解釈が可能である。それでも、自由党は得票率を落としてALPが得票率を上げているので、連邦レベルの野党にとって順風である。クインズランド州もバランス理論に従ってALPが政権に就いたが、当選挙では自由国民党が健闘している。州のALP政権に対するバランスが図られたと考える向きもあるが、得票率では自由国民党が若干落ちてALPが上がっているの、連邦保守党陣営にとってはやはり逆風が吹いたと言える。
- 29) Dean Jaensch, *The Australian Party System*, George Allen & Unwin, Sydney, 1983, pp.98-99.
- 30) 日本は逆に責任の所在がはっきりせず、野党が過半数を占めた参議院が内閣不信任案を可決させたことがある。
- 31) Alan Griffin, "Hanson 'would have won anyway', Senate crossbench of 'at least 14'", *The Australian*, Aug.16, 2016, p.4; Alan Griffin, "Turnbull is not quite as dumb as he looks on senate voting reform", *The Australian*, Aug.16, 2016, p.12.
- 32) ところが、デイは本業のホーム建設ビジネスの状態が芳しくなく、2016年11月1日に上院議員を辞職した。憲法に則って、後任の南オーストラリア州選出上院議員には家族第一の政治家が任命されるはずである。
- 33) 陶山宣明「2015年カナダ連邦選挙の分析」『帝京平成大学紀要』第27巻、2016年3月、67-77頁参照。
- 34) 選挙後の国会が開会して、ターンブル首相は政府法案を通すのに四苦八苦しているところか、野党側に逆に法案を通されている始末である。